

「アダム・スミスの価値尺度論」に関連する D. P. オブライエンの所論(1975年)

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(19)：1970年代(その8)——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1、第2、第3、第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第9巻第1、第3号、第10巻第1、第2、第3、第4号および第11巻第1、第2号では、1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は、それにひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1975年に出版されたD. P. オブライエン (D. P. O'Brien) の一著書のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつオブライエ

ンの所論の内容を整理しようとするものである。

D. P. オブライエン (1975年)

オブライエンは、1975年の彼の一著書 (D[enis] P. O'Brien, *The Classical Economists*, Oxford: Clarendon Press, 1975. 以下、O'Brien [1975] と略記する) の第4章「古典派価値論 (Classical Value Theory)」第1節「アダム・スミス (Adam Smith)」でスミスの価値論を取り扱うさい、事実上、『国富論』第1篇第6、第7章においてスミスの価値論の主なものが展開されていると捉えたとともにその第6、第7章で述べられているものとしてのスミスの主な価値論を、長期的な価値決定 (long run determination of value) および短期的な価値決定 (short run determination of value) についての議論として捉えつつそのようなものとしてのスミスの議論について検討をくわえたうえで、⁽¹⁾さらに、同じくスミスの価値論についての検討という脈絡のなかで、⁽²⁾『国富論』第1篇第5章「諸商品の真実価格と名目価格について、すなわち、それらの商品の労働での価格とそれらの商品の貨幣での価格について」をスミスが述べたもののうちで恐らく間違いなく最も入り組んだ章としつつ⁽³⁾そこでのスミスの議論に関して、つぎのような内容の見解を示している。

① 『国富論』第1篇第5章において「支配される労働 (labour commanded)」が富裕 (riches) の一尺度として使用されている、ということが見いだされる。スミスは、分業が行われるようになったのちには労働者はほとんどの商品を交換によって獲得するということから、富裕は他人の労働にたいする支配力にある、としたのである。⁽⁴⁾

② そしてそこからスミスは、「支配される労働」があらゆるものの「真実価格 (real price)」であり、その「真実価値 (real value)」は、その購買者が彼自身からはぶきそして他人に課する労苦 (toil) である、としたのであった。なお、この命題の基礎となっているものは、労働はある不変の不効用を伴うという考えで⁽⁵⁾あった。⁽⁶⁾

③ しかしながら、たとえば「真実価格 (real price)」という用語が、商品に体化された (embodied) 不効用を意味するものとして使用されたり、こんにち我々が「実質価格 (real price)」と呼ぶものつまり貨幣価値の変化についての調整がなされたのちの価格といったものを意味するものとして使用されたり、労働者の生存費 (subsistence of the labourer)⁽⁷⁾を意味するものとして使用されたり、⁽⁸⁾といったように、スミスの叙述はきわめて混乱したものであるのであった。⁽⁹⁾

④ このことのゆえに、この第5章は、評釈者たちに、あるまじくリアルな問題を提出してきたのであった。ある人々は、スミスは一つの厚生指標 (a welfare index) を提供することを試みていたのだ、と考えてきた。⁽¹⁰⁾すなわち、商品の「真実価値」とは、その商品の労働価格 (labour price) つまりその商品が支配する不効用の単位数であり、そしてスミスは、ある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するのに伴う労働不効用の削減ということと関連づけられる厚生における諸改善といったものを探り出したいと思っていたのだ、とみるのである。また、初期の著作家たちは、とくにリカードウ (D. Ricardo) は、スミスが、価値の決定因としての、体化された労働 (labour embodied) と支配される労働との間で、どうしようもないほど混乱するにいたっていた、と考えてきたのであった。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾

⑤ しかしながら実際には、スミスはこの第5章では二つの異なる問題と取り組んでいるのである。一面では、厚生という観念は存在している。労働者の(不変の)不効用が支配する生存費の高 (quantity of subsistence) は、経時的に、変動する、それゆえ、労働者はたとえどんな水準のものであれとにかく彼の生存費 (subsistence) を獲得するためにはある不変な量の不効用を払わなければならないのではあるけれども諸商品の真実価値(不効用支配力)は、それらの諸商品の、(変動する)生存費にたいする支配力が変化するにつれて、経時的に、変動するということになる。「労働者の生存費 (subsistence) は……、場合によって非常に異なることがある。たとえば、それは、富裕 (opulence) にむかって前進している社

会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも、いっそう豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりもいっそう豊かである。しかしながら、他のどんな商品も、ある特定の時点では、それがそのときに購買しうる生存費の数量 (quantity of subsistence) に比例して、より大きい量の労働、またはより小さい量の労働を購買するであろう」(WN, p. 35. 大河内訳〈I〉, 61ページ), というわけである。⁽¹⁴⁾これは、貨幣価値低下のゆえにある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力が経時的に変動するといった同じ第5章のそれより前のところで扱われている問題⁽¹⁵⁾とは別の一つの問題である。第一のケースでは、その差異は、労働者の生存費 (subsistence) の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということのゆえのものであり、それに対し第二のケースでは、その差異は、貨幣価値の変動ということのゆえのものなのである。⁽¹⁶⁾しかしこの後者がこの第5章の主要最大関心事であるのである。そして、[WN [1904] でいえば、] 17ページからなるこの章において終わりの9ページが貴金属の価値の諸変化についての議論にさかれている、またそれゆえ変動の第二の源泉を扱っている、ということが、意味をもっているのである。⁽¹⁷⁾

⑥ とはいえ、それら二つのものは互いに結びつきをもつこととなる。それら両者はともに究極的には労働不効用にたいする支配力の変動ということを生み出すという意味で、それらは結びつけられるのである。しかしそれらは、異なった理由から、そのようなことを生み出すのである。長期的には労働者の生存費 (subsistence) は穀物の価格 (price of corn) とともに変動するゆえ、変動1は、穀物デフレーターによって最も良好に対処されることができ、また、穀物は貨幣よりも安定的なものであるゆえ、穀物デフレーターは、変動2に対処するのにいっそう良好なものである。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾たとえば、例証として我々はつぎのようなスミスの文章を引用してもよいであろう。「それゆえ、穀物で納めることになっている地代は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、

他のなんらかの商品で納めることになっている地代は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動（変動1）からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動（変動2）からも、影響をこうむるのである」（WN, pp. 35-36. 大河内訳〈I〉, 61-62ページ。（ ）内は、オブライエンが WN[1904], vol. 1, pp.37-38——WN および大河内訳〈I〉におけるそれに対応する箇所は前記の箇所——からスミスの文章を引用するにさいして挿入している部分⁽²¹⁾）。

⑦ たしかにこのようなものとしてのスミスの議論には、一面で厚生という観念が存在しているのであり、そしてそのスミスの議論は一つの厚生標準 (a welfare standard) というものに関連をもつものとみなすこともできるであろう。しかしながらまた同時に、そのスミスの議論をそのようなものとみなす場合に注意すべきことは、スミスがそこにかかわることとなっている厚生標準とは、部分にかかわる一つの厚生標準 (a sectional welfare standard) であって、全体にかかわる一つの厚生標準 (a general welfare standard) あるいは国民全体にかかわる一つの厚生標準 (a national welfare standard) ではない、ということである。スミスは、短期では〔労働者の〕生存費の大きさ (value of subsistence)⁽²²⁾ は直接的に穀物の価格とともに変動しないゆえ地代を穀物で定めるのが〔地代受領者にとって〕（労働にたいする支配力——他の人々の労苦〈sweat〉にたいする支配力——という観点からみて）有利になる〔ことがある〕⁽²³⁾ ということを、はっきりと述べている、また、うえて確認された変動の二つの源泉⁽²⁴⁾ とも、労働不効用にたいする支配力における諸変動という共通の問題とかかわりをもつものであり⁽²⁵⁾、そしてその労働不効用にたいする支配力というもののこそが、スミスの議論における富 (wealth) の本質なのである。だが、スミスは、彼の議論に見受けられることのできるその標準を、社会 (community) にとっての一つの厚生標準として使用しているのではなく、部分的な利害関係者にとっての、とくに、ここでのスミスの関心の的である地代受領者たちにとっての、一つの厚生標準として、使用しているのである。ス

ミスは、全体にかかわる一つの厚生標準を提供することになるであろうような総不効用にたいする国民所得の比率といったことを論ずるというところへまでは、いってはいないのである。²⁶¹

(注)

- (1) それについては、O'Brien [1975], pp. 78-82 を見よ。また、O'Brien [1975], chap. 2, sec. iii, pp. 35-36 も見よ。
- (2) O'Brien [1975], pp. 82, 84 におけるオブライエンの叙述の展開の仕方を見よ。
- (3) O'Brien [1975], p. 82.
- (4) O'Brien [1975], p. 82.
- (5) このことを示すものとしてオブライエンは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものと言うことができよう」というスミスの文言 (Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. ...Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下、WN と略記する——, p. 33. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年〔1789年の『国富論』原著第5版を底本とした邦訳〕——以下、大河内訳と略記する, ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——〈I〉, 57ページ)を引用し、そして、この真実価値〔うへの引用文のなかに現れる「労働」の「価値」〕は、スミスが労働の名目価値と呼ぶものすなわち貨幣のタームで表された労働の価格から区別されるのであった、とする。O'Brien [1975], p. 82.

なお、本稿で取り扱われているオブライエンの著書においてオブライエンが使用している『国富論』の原典そのものは、O'Brien [1975], p. 18 の Bibliography にみられるように、Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. ...E[dw]in Cannan [2 vols.] (London [: Methuen & Co.], 1904) であるのであるが——以下、それを WN [1904] と略記する——、本稿においては、本稿に先立つ諸稿におけるのと同様、前掲のモダン・ライブラリー版を使用し、オブライエンが示している『国富論』中の箇所をそれに対応する前掲モダン・ライブラリー版『国富論』中の箇所ですすとともに、必要に応じて若干の説明等を付することとした。

- (6) O'Brien [1975], p. 82.
- (7) 本稿で取り扱っているオブライエンの著書の、たとえば索引をみると、'subsistence' の項には、38, 40, 46, 57, 60, 61, 62, 63, 64, 65-6, 69, 83, 87, 111, 114, 116-17, 131, 137, 180, 218, 246, 247, 254, 257, 285といったペー

ジが示されている。そして、それらの箇所におけるオブライエンの叙述をみると、オブライエンは概して、‘subsistence’ という用語を、たとえば「生存賃金説 (subsistence theory of wages, 賃金生存費説)」でいわれるような「生存費」、「生存維持費」といった意味で使用し、またたとえば『国富論』の原文中に現れる‘subsistence’ といったものと同じくそのようなものとして理解しているように思える。このような事情から、本稿では、『国富論』からの引用文を含めてオブライエンが‘subsistence’ という用語を用いている場合、それを、「生存費」とすることとした——ただし、『国富論』に現れる‘subsistence’ をそのようなものとして一括して理解すること自体には問題があるとわたくしは思う——。

なお、オブライエンによれば、スミスの議論での「生存費」とは物理的 (physical) なものではなくて心理的 (psychological) なものであり、また、その水準は固定的なものではなくて可動的 (movable) なものであった、と捉えられる。

O'Brien [1975], pp. 46, 57, 63, 83, 116-117, 131-132 を参照せよ。

- (8) なお、オブライエンは、スミスが「真実価格 (real price)」という用語を「労働者の生存費 (subsistence of the labourer)」を意味するものとして使用している箇所の例として、WN [1904], vol. 1, p. 37 (WN, p. 35——大河内訳でいえば、〈I〉, 61ページ——がその箇所に対応) を、あげている。O'Brien [1975], p. 107n. 8.

なお、『国富論』のその箇所には、“The subsistence of the labourer, or the real price of labour, ...” というスミスの文言を見いだすことができる。

- (9) O'Brien [1975], pp. 82-83.

- (10) オブライエンは、とくに、我々が本誌第5巻第3号でとりあげたH. M. ロバートソンとW. L. テイラーとによる共同研究——H. M. Robertson and W. L. Taylor, “Adam Smith's Approach to the Theory of Value,” *Economic Journal*, vol. 67 (no. 266, June 1957), pp. 181-198 (reprinted in *Essays in Economic Thought: Aristotle to Marshall*, ed. Joseph J. Spengler and William R. Allen (Chicago: Rand McNally & Co., © 1960), pp. 288-304)——および1959年のM. ブラウグの研究——Mark Blaug, “Welfare Indices in *The Wealth of Nations*,” *Southern Economic Journal*, vol. 26 (no. 2, October 1959), pp. 150-153——を参照するよう、指示している。O'Brien [1975], p. 107n. 9.

- (11) なお、このような見方にたいしてオブライエンはつぎのような論評をくわえている。すなわち、もしもこのような見方が意味をなすとすれば、我々は当然、たとえば経済成長とともに向上していく1人当たり実質賃金 (real wages) といったようなことを指し示す働きをなす経時的な厚生についてのなんらかの尺度をスミスが提供しているの見いだすことを、予期するであろう。だが実際には、スミスはそのようなことをしているわけではなくて、穀物賃金 (corn wage) は、長

期的には、実際には不変的なものである、と主張しているのである。O'Brien [1975], p. 83.

- (12) なお、オブライエンによれば、『国富論』においてスミスは、事実上長期的な価値決定ということに関しては、一つには分配の問題についての配慮ということから、一つの「生産費」価値説 (a 'cost of production' theory of value, a 'cost of production' value theory) を提示した、とされるのであるが——なお、スミスをして『国富論』において「生産費」価値説を提出させることとなった諸要因ということに関するオブライエンの指摘については、O'Brien [1975], pp. 35-37, 78 を見よ——、そのさいオブライエンは事実上、スミスの議論ではその「生産費」価値説は、商品の生産において費用を要する投入物が労働だけ、つまり、商品の生産に投下されて商品に体化される労働だけが報酬を要求するといった「資本の蓄積と土地の占有に先立つ」経済のケースでのそれと、報酬を要求する投入物として労働だけでなく資本および土地をも考慮に入れなければならない資本の蓄積と土地の占有の行われる経済のケースでのそれ、という二つの形で、提出されている、とみている。詳しくは O'Brien [1975], pp. 78-79 を見よ。

また、オブライエンによれば、労働のほかに報酬を要求するものが存在して地代と利潤が価格のうちのいくらかを占めるとき、当該商品が多少なりとも労働集約的な一商品と交換されるところでは、体化された不効用〔当該商品に体化された労働不効用〕は支配される不効用〔当該商品と交換される一商品に体化され、したがってその交換によって当該商品に支配されることとなる労働不効用〕よりも少ないということになるであろう、ということは、明らかなことである、とされる。O'Brien [1975], p. 83.

- (13) O'Brien [1975], p. 83.

- (14) 'subsistence' を「生存費」としたことについては、また、スミスの議論における「生存費」概念ということについてのオブライエンの理解については、本稿前出の注7を見よ、また、後出の注18も参照せよ。ただし、わたくしには、いま本文で引用された『国富論』におけるスミスのその文言のなかに現れる 'subsistence' は、「生活資料」として理解するほうが、スミスのその文言がその一部を構成しているところのそこでのスミスの議論に、即していることになるように思える。

- (15) なお、オブライエンは、スミスが事実上そのような問題に論及している「前のところ」として、WN [1904], vol. 1, pp. 35-36 (WN, pp. 33-34——大河内訳でいえば、〈I〉、59-60ページ——がその箇所に対応) を、あげている。O'Brien [1975], p. 107n. 11.

なお、『国富論』のその箇所には、同一名称の铸貨に含まれる金銀の量の減少および金銀それ自体の価値の減少による、貨幣地代の価値の経時的減少といった

ことに關するスミスの議論が見いだされる。

- (16) したがって、ここでオブライエンがいう「貨幣価値」とは、事実上、他の諸商品にたいする貨幣の支配力ということを指している、といえる。
- (17) O'Brien [1975], p. 83. なお、本文で言及されている *WN* [1904] でのページの数そのものは、*WN* でのページの数と符合しているといえる。
- (18) したがって、長期的には穀物の量で示された「労働者の生存費」は不変的である、ということになる。そしてこのことは、本稿の④のなか、および注11でみたオブライエンの見解——つまり、ある人々は、スミスは一つの厚生指標 (a welfare index) を提供することを試みていたのだと考えてきた、すなわち、商品の「真実価値」とはその商品の労働価格 (labour price) つまりその商品が支配する不効用の単位数でありそしてスミスはある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するに伴う労働不効用の削減ということと関連づけられる厚生における諸改善といったものを探り出したいと思っていたのだ、とみてきたのであるが、もしそのような見方が意味をなすとすれば、我々は当然、たとえば経済成長とともに向上していく1人当たり実質賃金 (real wages) といったようなことを指し示す働きをなす経時的な厚生についてのなんらかの尺度をスミスが提供しているのを見いだすことを予期するであろう、だが実際にはスミスはそのようなことをしているわけではなくて、彼は穀物賃金 (corn wage) は長期的には実際上は不変的なものであると主張しているのである、というオブライエンの見解——に、対応しているように思える。

なお、オブライエンは、本稿で取り扱っている彼の著書の他の箇所、スミスの議論における賃金の長期的趨勢ということに関して、つぎのような指摘をなしてもいる。すなわち、概してスミスは、賃金 (wages) は「資本蓄積、経済成長につれて」最初は上昇し、そしてその後、人口が資本蓄積に追い付くにつれて生存費へと後退する、とみている、しかしながら、スミスの議論での生存費は心理的なものまた可動的なものであるため、賃金の趨勢線は、たとえば次ページの図 a, b, c で示されるような異なった経路のうちのいずれをもたどりうるということとなり、その意味で、『国富論』での、実質賃金 (real wages) の長期的趨勢は、不定的なものということとなる。O'Brien [1975], pp. 131-133 を見よ。

なお、スミスの議論における人口と生存費、賃金といったことについてのオブライエンの所論については、O'Brien [1975], p. 57 も見よ。

また、オブライエンは他の箇所においてつぎのような指摘をなしている。すなわち、事実上、すべての古典派賃金諸理論は、『国富論』でのスミスの議論のなかに見いだされる賃金決定への様々なアプローチから出てきているのであり、そのスミスの議論は、一つの賃金基金説 (a wage-fund theory) の要素、一つの生産力説 (a productivity theory) の要素、一つの残余説 (a residual theory) の要素、

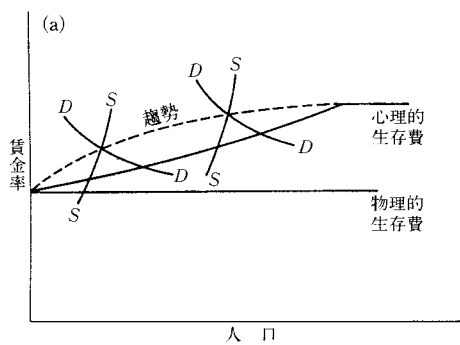


図-a

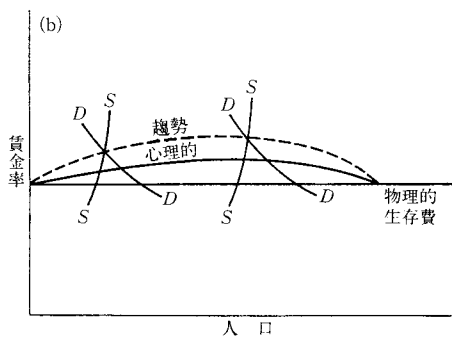


図-b

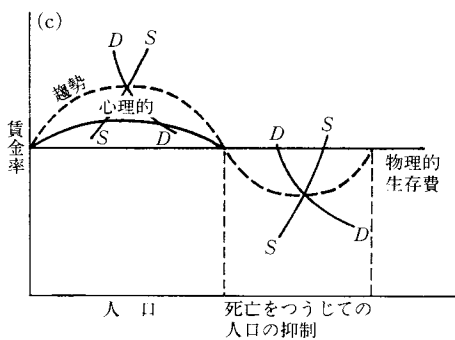


図-c

(出典：図 a, b, c ともに O'Brien [1975], pp. 132-133.)

一つの契約説 (a bargaining theory, 交渉力説) の要素, また, 食料品の価格 (price of provisions) と貨幣賃金水準 (level of money wages) との間の関係についてのスミスの見解にはかなりの曖昧さが存在したけれども一つの生存費説 (a subsistence theory) の要素, を含んでいたものであり, またそれらの諸アプローチは互いに相容れないものではなかったのであるが, それらの諸アプローチのうちの生存費説〔生存賃金説〕は, 賃金の市場決定についての一理論というよりもむしろ, 一つの長期理論 (あるいは時として, 非常な長期についての一理論 <a secular theory>) であったのである。詳しくは, O'Brien [1975], p. 111, p. 137 nn. 1-6 を見よ。

- (19) なお, このことに関してオブライエンは、『国富論』第1篇第11章のなかの「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」中のスミスの議論を参照するよう指示している。O'Brien [1975], p. 107n. 12 を見よ。
- (20) なお, 本稿の⑤のなかおよび⑥でみてきたオブライエンの議論の脈絡からして, オブライエンがここで「穀物は貨幣よりも安定的なもの」といったことに言及するとき, そこでは事実上, 「他の諸商品にたいする穀物の支配力は, 他の諸商品にたいする貨幣の支配力よりも, 経時的に安定的である」といったことが意味されている, と理解することができよう。
- (21) O'Brien [1975], pp. 83-84. なお, 本稿の⑤と⑥においてみてきたオブライエンの議論——わたくしは本稿の⑤および⑥では, オブライエンの叙述をできるだけそのまま示すこととした——そのものは, つぎのようなことを言おうとしているものとして理解することもできるかもしれないであろう。

I [スミスが『国富論』第1篇第5章において実際に取り組んでいた問題] :

スミスは実際には、『国富論』第1篇第5章では以下のような二つの異なる問題と取り組んでいたのである。その一つはつぎのものである。すなわち, スミスの議論では, 労働の不効用は経時的に不変で, 労働者はたとえどんな水準のものであれとにかく彼の生存費を獲得するためにはある不変な量の不効用を払わなければならないということになっており, そして, 諸商品の真実価値 (不効用支配力) は, それらの商品がそのような不変の不効用を伴うものとしての労働をどれほど支配しうるかということによって確定され, また, 諸商品の支配しうる労働の量そのものは, それらの商品が「労働者の生存費」——オブライエンのいうスミスの議論における「生存費 (subsistence)」ということに関しては本稿前出の注7および注18を参照せよ——をどれほど多く支配しうるか, ということによって確定されることとなっている。ところが, 同じくスミスの議論によれば, その「労働者の生存費」の水準そのものは社会の前進性ということに依存するのであって, 社会の前進性の変動はその「労働者の生存費」水準の変動をもたらすということになっていたものであり, それゆえまた, 諸商品の労働支配力は, したがってまた

諸商品の真実価値（不効用支配力）は、それらの商品が、その水準そのものが経時的に変動しうるところの「労働者の生存費」を、どれほど支配しうるか、ということによって確定されることになるのであり、また、そのようなその水準が経時的に変動しうる「労働者の生存費」にたいしてそれらの商品がもつ支配力が変化するにつれて、同一のそれらの商品の労働支配力、真実価値（不効用支配力）そのものが、経時的に、変動してしまうということになるのであった。このようなことにかかわる事柄が、スミスがこの第5章で問題にしようとしたことの一つであったのである。

他方、スミスがこの第5章で取り組もうとしたもう一つの問題、しかもスミスがこの第5章でとくに大きな関心を払っていたものは、悪鑄や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということによって、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」が経時的に変動してしまう、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量が経時的に変動してしまう、ということ、こういったことにかかわるものであったのである。

Ⅱ〔スミスが『国富論』第1篇第5章において取り組んでいたそれら二つの問題の結びつき〕：

このように実際にはスミスは『国富論』第1篇第5章では、うえのような二つの異なる問題と取り組んでいたのであった。ところで、うえの第一の問題でみたように、スミスの議論では「労働者の生存費」の水準は社会の前進性ということに依存し、社会の前進性における変動は「労働者の生存費」水準の変動をもたらすのであるが、「労働者の生存費」水準のこのような変動は、「労働者の生存費」をどれほど支配しうるかということに依存するものとしての諸商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値に、影響を及ぼすこととなる。

他方、第二の問題は、悪鑄や貴金属自体の価値の変化等といったことによる他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということによって、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」が変動する、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量が変動する、といったことにかかわるものであった。したがって、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる労働（労働不効用）の量＝（ある所与の量のそれら他の諸商品が支配しうる貨幣量）／（「労働者の生存費」），において、分子の変動は、その比率に影響を及ぼし、ある所与の量のそれら他の諸商品が支配しうる労働（労働不効用）の量に影響を及ぼすこととなる。

つまり、「それら二つのもの——『労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性』と『貨幣価値の変動』——は互いに結びつきをもつこととなる。それら両者はともに究極的には労働不効用にたいする

支配力の変動ということを生み出すという意味で、それらは結びつけられるのである。しかしそれらは異なった理由から——『社会の変動する前進性』は『労働者の生存費』水準の変動をもたらすことによって、他方、『貨幣価値の変動』は、『ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力』の変動を、逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる貨幣量の変動を、もたらすことによって——、そのようなことを——諸商品の労働不効用にたいする支配力の変動を——生み出すのである、というわけである。そしてまたこのような意味で、うゑの二つの問題と取り組んでいるスミスの議論は、不効用支配力、それとの関連での厚生、といったこととかかわりをもつものでもあったのである。

Ⅲ〔社会の前進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動、「貨幣価値の変動」による「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の変動、それらをつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動（真実価値の変動）、ということにたいするスミスの対処〕：

ところでスミスは、「長期的には労働者の生存費 (subsistence) は穀物の価格 (price of corn) とともに変動するゆゑ、変動1——つまり、社会の前進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動をつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動——は、穀物デフレーターによって最も良好に対処されることができる」と考えた。長期的には、労働者の生存費は、穀物の価格とともに変動する。したがって、長期的には、「労働者の生存費」を「穀物の価格」で除することによって得られる穀物の量で示された「労働者の生存費」は、不変的である。それゆゑ、穀物デフレーターを使用すれば、長期的には、「労働者の生存費」をある不変的な穀物量として確定、表示することができ、「労働者の生存費」の変動をつうじての諸商品の労働（労働不効用）支配力の変動といったことを回避しつつ、それらの商品の労働（労働不効用）支配力、真実価値を、それらの商品が支配しうる穀物総量とある不変的な穀物量で示される「労働者の生存費」との関係で、確定、表示することができる、というわけである。

他方でスミスはまた、「穀物は貨幣よりも安定的なものであるゆゑ——つまり、他の諸商品にたいする穀物の支配力は、他の諸商品にたいする貨幣の支配力よりも、経時的に安定的なものであるゆゑ——、穀物デフレーターは、変動2——つまり、悪銭や貴金属自体の価値の変化等による貨幣の他の諸商品にたいする支配力〔『貨幣価値』〕の変動ということからの、『ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力』の変動、逆に言えば、ある所与の量の他の諸商品が支配しうる貨幣量の変動——に対処するのにいっそう良好なものである」と考えた。つまり、悪銭や貴金属自体の価値の変化等といったことのゆゑに貨幣が他の諸商品にたいしてもつ支配力〔『貨幣価値』〕は経時的にヨリ不安定的なものであり、またそれゆゑ、貨幣の量で表示された他の諸商品の価格、ある所与の量のそれら

の商品が支配しうる貨幣量——逆に言えば、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」——は、経時的にヨリ不安定的なものとなるのにたいし、穀物が他の諸商品にたいしてもつ支配力は経時的にヨリ安定的なものであるということから、穀物の量で表示された他の諸商品の価格、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる穀物量——逆に言えば、ある所与の量の穀物のそれらの商品にたいする支配力——は、経時的にヨリ安定的なもの、ということになり、それゆえ、穀物デフレーターを使用すれば、悪鋳や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての貨幣の他の諸商品にたいする支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕によって生起する「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の変動——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品の貨幣にたいする支配力の変動——といった事態を、ある程度回避することができる、したがってまた、そのような変動による労働（労働不効用）支配力、真実価値の変動を、ある程度回避することができる、というわけである。

いま、このような二つの道すじで穀物デフレーターを用いるとすれば、たとえばある一定量の商品Aの、労働支配力、真実価値（不効用支配力）は、（ある一定量の商品Aが支配しうる穀物量）／（穀物量で表示された「労働者の生存費」）、によって確定されることとなる。そして、その比率を構成する分子は経時的にヨリ安定的なものであるとともに、その分母も、長期的には、不変的なものである。したがってそこでは、その一定量の商品A（たとえば、1単位の、あるいは2単位の、……あるいはさらにn単位の商品A）の労働支配力、真実価値（不効用支配力）は、長期において、商品Aのその一定量に対応したヨリ安定的な大きさとして確定、表示されうる、ということになる。様々な商品の一定量がもつ労働支配力、真実価値（不効用支配力）の大きさが、長期において、ヨリ安定的に確定、表示されうるのである。

IV〔スミスが事実上こういった二つの道すじで穀物デフレーターを使用しようとしていた、ということを示す例〕：

なお、スミスが事実上、こういった二つの道すじで穀物デフレーターを用いようとしたということは、つぎのようなスミスの文章にもうかがえる。「それゆえ、穀物で納めることになっている地代〔の真実価値（不効用支配力）〕は、一定量の穀物が購買しうる労働の量の変動から影響をこうむるだけである。ところが、他のなんらかの商品で納めることになっている地代〔の真実価値（不効用支配力）〕は、ある特定量の穀物が購買しうる労働の量の変動（変動1）からだけでなく、ある特定量のその商品で購買しうる穀物の量の変動（変動2）からも、影響をこうむるのである」（〔 〕内は中川、（ ）内はオブライエン）。すなわち、『国富論』からのこの引用文において「（変動1）」を付した部分は、スミスが変動1に対処するために穀物デフレーターを用いようとしたということを、また「（変動

2))を付した部分は、スミスが変動2に対処するために穀物デフレーターを用いようとしたということを、例示しているのである。

この場合、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)は、その一定量の穀物が支配しうる労働量そのものによって、つまり、(その一定量の穀物)/(穀物量で表示された「労働者の生存費」)、によって、確定され、他方、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)は、つぎのような形で確定されることとなる。すなわち、一方の道すじで穀物デフレーターを使用することによって特定量のその商品が支配しうる穀物量を確定し、また、もう一方の道すじで穀物デフレーターを使用することによって穀物量で表示された「労働者の生存費」の大きさを確定する、そして、その穀物量とその「労働者の生存費」の大きさとの関係によって、つまり、(特定量のその商品が支配しうる穀物量)/(穀物量で表示された「労働者の生存費」)、によって、その地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)が確定されることとなるのである。そして、穀物量で表示された「労働者の生存費」は長期的には不変的なものであり——したがって、社会の前進性における変動による「労働者の生存費」水準の変動をつうじての労働(労働不効用)支配力の変動(変動1)を、長期的には、回避することができる——、また、特定量の商品が支配しうる穀物量は、特定量のその商品が支配しうる貨幣量よりも経時的にヨリ安定的なものである——したがって、悪銭や貴金属自体の価値の変化等による貨幣の他の諸商品にたいする支配力〔「貨幣価値」〕の変動ということからの、「ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力」の経時的変動(変動2)、逆に言えば、それらの商品の貨幣にたいする支配力の経時的変動、またそういったことをつうじての労働(労働不効用)支配力の変動、といった事態を、ある程度回避することができる——。したがって、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)も、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)も、長期において、ヨリ安定的な大きさとして、確定、表示されることができるのである。

しかしながら同時にまたこの場合には、もし一定量の穀物が支配しうる労働量に変動があるときには、つまり、(一定量の穀物)/(穀物量で表示された「労働者の生存費」)、において、分母に変動があるときには、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)の大きさも、ある特定量の他のなんらかの商品で納めることになっている地代の労働支配力、真実価値(不効用支配力)の大きさも、その変動から影響を受けることとなる。このようなことは、たとえば、社会の前進性に変動が生じて「労働者の生存費」が変動し、しかも、ある方向でのその「労働者の生存費」の変動の率と、「穀物

の価格」の変動の率およびその方向とが一致しないときに、おこることとなる——ただし、長期的には「労働者の生存費」は「穀物の価格」とともに変動するのであるから、長期的には穀物量で表示された「労働者の生存費」は不変的なものとなり、したがって長期的にはこのようなことは回避されることとなる——。

また、ある特定量の他のなんらかの商品が支配しうる穀物量は、ある特定量のその商品が支配しうる貨幣量よりも経時的に安定的ではあるが、もしそれに変動が生じるときには、その変動は、ある一定量の穀物で納めることになっている地代の労働支配力、実質価値（不効用支配力）の大きさには関係はないが、ある特定量のその商品で納めることになっている地代の労働支配力、実質価値（不効用支配力）の大きさには影響を及ぼす、ということになるのである。

(22) 'subsistence' を「生存費」としたことについては、また、スミスの議論における「生存費」概念ということについてのオブライエンの理解については、本稿前出の注7を見よ、また、同じく前出の注18も参照せよ。

(23) 言うまでもなく、「短期では〔労働者の〕生存費の大きさは直接的に穀物の価格とともに変動しない」とすれば、社会の前進性における変動、またそれによる「労働者の生存費」の変動の存否にかかわらず、短期では、穀物量で表示された「労働者の生存費」は経時的に変動しうる。たとえば、社会の前進性になんの変動もなく、したがってまた「労働者の生存費」になんの変動もない場合にも、もし穀物の価格が変動すれば、穀物量で表示された「労働者の生存費」は変動することとなる。ただし、すでにみたように、オブライエンは、スミスが『国富論』第1篇第5章で取り組もうとした二つの問題のうちの一つそれ自体は、労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということ〔「変動1の源泉」〕による諸商品の労働支配力、実質価値（不効用支配力）の変動〔「変動1」〕ということに関するものである、と捉えたのであった。なお、「長期的には労働者の生存費は穀物の価格とともに変動する」とすれば、その場合には、穀物価格の変動による穀物量で表示された「労働者の生存費」の変動といったことも、長期では、存在しない、ということになる。

なお、本文でみたようなことをスミスが述べている箇所として、オブライエンは、WN [1904], vol. 1, p. 38 (WN, p. 36——大河内訳でいえば、〈I〉, 62—63ページ——がその箇所に対応) をあげている。O'Brien [1975], p. 107n. 14.

そして、『国富論』のその箇所には、つぎのような内容をもったスミスの議論を見いだすことができる。

労働の貨幣価格 (money price of labour) [本文でみられた「生存費の大きさ (value of subsistence)」に対応] は、穀物の貨幣価格 [本文でみられた「穀物の価格」に対応] とともに年々動揺するというようなものではない。労働の貨幣価格は、穀物という生活必需品の平均価格または通常価格に——穀物という生活必

需品の一時的または偶然的な価格〔本文でみられた「穀物の価格」に対応〕に、ではなしに——対応しているように思えるのであり、そしてその穀物の平均価格または通常価格は、銀の価値によって——銀を市場に供給する諸鉱山の豊度の程度によって、言い換えると、ある特定量の銀を鉱山から市場にもたらすために使用されなければならない労働の量、したがってまた消費されなければならない穀物の量によって——規制されるのであるが、その銀の価値は、世紀から世紀にかけては大きく変動することがあるが、年々大きく変動することは滅多になく、半世紀またはまる1世紀のあいだずっと同一あるいは同一に近いということがしばしばあるのである。それゆえ、穀物の通常の貨幣価格または平均的な貨幣価格もまたこういった期間中ずっと同一または同一に近いことがありうるのであり、そしてまた、少なくともその社会が他の点においてひきつづき同一またはほぼ同一の状態にあるかぎり、労働の貨幣価格〔本文でみられた「生存費の大きさ」に対応〕も、穀物の通常のまたは平均的な貨幣価格とならんでこういった期間中ずっと同一またはほぼ同一に近いことがありうるのである。これにたいし、そういった期間中に穀物の一時的で偶然的な価格〔本文でみられた「穀物の価格」に対応〕はある年には前年の2倍になることも、たとえば1クォーター当たり25シリングから50シリングに動揺することも、しばしばありうるのである。この場合、穀物が後者の価格であるときの穀物地代の名目価値は、穀物が前者の価格であるときの穀物地代の名目価値の2倍になるであろうが、それだけでなく、穀物が後者の価格であるときの穀物地代の真実価値 (real value) も、穀物が前者の価格であるときの穀物地代の真実価値の2倍になるであろう。言い換えると、その穀物地代は、2倍の労働量——または他の多くの諸商品の2倍量——を支配するであろう。というのは、労働の貨幣価格〔本文でみられた「生存費の大きさ」に対応〕は——またそれとならんで他のたいていの物の貨幣価格は——、このような変動のあいだひきつづき同一であるからである。

(24) つまり、「労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性」と、悪銭や貴金属自体の価値の変化等といったことによる他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動としての「貨幣価値の変動」。

(25) 本稿の⑥および注21を見よ。

(26) O'Brien [1975], pp. 83, 84. なお、オブライエンは、本稿で取り扱っている彼の著書の他の箇所、スミスは労働が生産する富 (wealth) を年々の生産物と同一視し、また、全体としての富に代えて1人当たりの富に注目しようとしたのであって、スミスの考えの厚生との掛かり合いはこのような視点からのものであった、とみつつ、『国富論』第1篇第5章のなかには穀物価格あるいは貨幣における諸変化の厚生に及ぼす影響の評価ということに向けられた経済的厚生についての一つの労働標準が提示されている、とするとともに、スミスは所得における諸

変化を厚生における諸変化に関係づけようとし、そしてその諸変化を、システム内の諸関係が変化するにつれてのある所与の額の実質所得 (real income) を獲得するのに必要な「労苦と骨折 (toil and trouble)」「不効用」の量における諸変動とみなそうとしたのであり、また、こういったことはスミスが全体としての国民所得から1人当たりの国民所得へと彼の注意を振り向けたということから出てきたことなのである、といった内容の指摘をなしている (O'Brien [1975], pp. 34, 36)。ところで、このような指摘のなかには、一見して以上でみてきたオブライエンの議論と抵触するようにも受け取られかねないものも含まれているのはあるが、オブライエンはうえのような内容の指摘につづけて、「我々は、様々な解釈を受けてきたこの標準という問題には後ほど立ち返る」、としているのであり (O'Brien [1975], p. 36)、そしてその予告をうけて展開されているのが以上でみてきたオブライエンの議論なのであるから、そのような内容の指摘をなしたさいのオブライエンの真意は、そして、『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論またそこで示されているとされる労働標準といったことについてのオブライエンの最終的な解釈は、以上でみてきたオブライエンの議論のなかに表現されていると考えても差し支えないであろう。

D. P. オブライエン (1975年) についての覚書 結びに代えて

オブライエンは、1975年の彼の一著書のなかで『国富論』における価値についてのスミスの議論を取り扱うさい、事実上、『国富論』第1篇第6、第7章においてスミスの価値論の主なものが展開されていると捉えたとともにその第6、第7章で示されているものとしてのスミスの主な価値論を、長期および短期における価値決定についての議論として捉え、そのようなものとしてのスミスの議論について検討をくわえたとうえで、さらに、同じくスミスの価値論についての検討という脈絡のなかで、『国富論』第1篇第5章におけるスミスの議論を検討するのであった。

そして、オブライエンによれば、その第5章では、労働はある不変の不効用を伴うものでありそしてその労働不効用にたいする支配力こそが富の本質であって、人々の富裕の程度は労働にたいする支配力によって測られ、

労働支配力によって確定される不効用支配力、労働不効用支配力の大きさがあらゆるものの「真実価値」の大きさなのである、といった考えが示されているのであるが、同時にそこでのスミスの叙述は、たとえば「真実価格 (real price)」という一つの用語がいくつかの異なった意味で使用されているといったように、きわめて混乱したものであった、とされるのであった。

そしてまたオブライエンによれば、そういった混乱のゆえにこの第5章でのスミスの議論はその議論に関する様々な解釈を生み出してきたのであり、たとえば、ある人々は、スミスはそこでは一つの厚生指標を提供しようとしていたのだと解釈し、またある人々は、スミスはそこでは価値の決定因としての「体化された労働」と「支配される労働」との間に、混乱状態に陥っていたのだとみてきた、とされるのであった。そして、そのような解釈に対して、スミスがその第5章で実際に取り組もうとした問題そのものということに関しては、オブライエンは、スミスはそこでは実際には一方で、諸商品の労働支配力、諸商品の労働不効用支配力したがって諸商品の真実価値はそれらの商品が支配しうる「労働者の生存費」の単位数ということによって確定されるのであるが「労働者の生存費」水準そのものは、「社会の変動する前進性」ということによって変動するのであり、それゆえ「労働者の生存費」水準のそのような変動が諸商品の支配しうる「労働者の生存費」の単位数、それらの商品の労働支配力・労働不効用支配力（真実価値）に影響を及ぼすことによって同一の諸商品の真実価値、したがってまた同一のそれらの商品の同一量をもつ真実価値が、異時点間において異なったものになりうる、といったことにかかわる問題、つまり、労働者の生存費水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性ということに起因する諸商品の労働支配力・労働不効用支配力（真実価値）の経時的変動といったことにかかわる問題、他方で、悪銭や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動〔「貨幣価値の変動」〕ということに起因するある所

与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力の経時的変動といったことにかかわる問題という、二つの別個な問題と取り組んでいたものであり、そしてこの後者の問題がスミスがこの第5章においてとくに大きな関心を払ったものであった、とみるのであった。また同時に、オブライエンは、それらの問題と取り組むそこでのスミスの議論のなかには厚生という観念は存在しているのであり、労働者の生存費水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性も、悪铸や貴金属自体の価値の変化等によるものとしての貨幣価値の変動も、異なる道すじをつうじてではあるが、究極的には、ともに、労働不効用にたいする支配力の変動ということを生み出すのであってその意味でそれらは互いに結びつきをもつものなのであった、とみるのであった。

そしてオブライエンは、長期的には労働者の生存費は穀物価格とともに変動する、つまり、長期的には穀物量で表示された労働者の生存費は不変的であるということからスミスは一方で、労働者の生存費を穀物量で表示すれば、長期的には、労働者の生存費水準の変動による諸商品の労働支配力・労働不効用支配力の変動（真実価値の変動）といった事態をまぬがれることができると考えるとともに、穀物が他の諸商品にたいしてもつ支配力は貨幣が他の諸商品にたいしてもつ支配力よりも経時的に安定的であるということからスミスは他方で、ある所与の貨幣支払額の他の諸商品にたいする支配力——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる貨幣量——に代えてある所与の量の穀物の他の諸商品にたいする支配力——逆に言えば、ある所与の量のそれらの商品が支配しうる穀物量——をみることとすれば、それは経時的にヨリ安定的なものでありうると考えたのだ、と解している、というように思えるのであった。

ところで、いまうえのような根拠にもとづいてうえのような二つの道すじで穀物を使用するとすれば、一定量のなんらかの商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値は、（一定量のその商品が支配しうる穀物量）/（穀物量で表示された「労働者の生存費」）、によって確定されることとな

る。つまり、まず、一定量のその商品が支配しうる穀物量を確定し、そしてその穀物量がどれだけの単位数の「穀物量で表示された労働者の生存費」を支配しうるかを確定することによって、確定されることとなる。そして、うへの比率において、分子は経時的にヨリ安定的なものであるとともに、その分母も、長期的には、不変的なものということとなる。かくして、一定量のその商品の労働支配力、労働不効用支配力、真実価値は、長期において、ヨリ安定的な大きさとして確定、表示されうる、ということとなるのである。だが同時にまたそれは、論理的には、もし一定量のその商品が支配しうる穀物量に変動があればその変動から影響をこうむるし、また、穀物量で表示された「労働者の生存費」に変動があれば——その変動は、一定量のその商品が支配しうるある量の穀物が支配しうるところの「穀物量で表示された労働者の生存費」の単位数に、したがってまた一定量のその商品が支配しうるある量の穀物が支配しうるところの労働の単位数に影響を及ぼすことになるゆえ——その変動からも影響をこうむる、つまり、他になんの変化もなくともそれらの変動の結果として、同じ商品の同一量をもつ真実価値の大きさが、異なった大きさのものとして確定、表示される、ということはあるうる、ということになるのであった。

なお、オブライエンは、スミスが『国富論』第1篇第5章で取り組もうとしたうえでみた二つの問題についてのスミスの議論のなかで取り扱われている「労働者の生存費の水準を決定するとスミスが考えるところの社会の変動する前進性」そして「(悪铸や貴金属自体の価値の変化等といったことによるものとしての他の諸商品にたいする貨幣の支配力の変動という意味での) 貨幣価値の変動」という変動の二つの源泉はともに、労働不効用にたいする支配力の変動ということとかわりをもち、そしてこの労働不効用にたいする支配力というものこそがスミスが富の本質と考えるものであったのであり、したがってまた、うへの二つの異なる問題との関連で展開されるスミスの議論のなかに事実上現れているところの、二つの道すじで穀物を用いることによって確定されるものとしての労働支配力、労働

不効用支配力といったものは、厚生の水準、一つの厚生標準ということと
かかわりをもつものとみなすことができるし、また事実、スミス自身の議
論のなかには、短期では「労働者の」生存費の大きさは直接的に穀物価格
とともに変動しないゆえに地代を穀物で定めるのが労働にたいする支配力
——他の人々の労苦にたいする支配力——という観点からみて「地代受領
者にとって」有利になる「ことがある」といったような、スミスが「有利
さ」ということの基準を「労働にたいする支配力——他の人々の労苦にた
いする支配力——」に求めているということを示す議論を見いだすことが
できる、とみるのであるが、同時にまたオブライエンによれば、スミスの
議論においてはそのような標準は社会にとっての一つの厚生標準として使
用されているのではなくて、部分的な利害関係者とくに地代受領者にとつ
ての一つの厚生標準として使用されているのであり——なお、オブライエ
ンによれば他方でまた、スミスは事実上、穀物賃金は「したがって、賃金
受領者（労働者）がある量のみずからの労働（労働不効用、労苦）と引き
換えに受け取る穀物タームで表された所得の大きさそのものは」長期的に
は実際には不変的なものであると主張している、とみられていたのであっ
た——、スミスは全体にかかわる一つの厚生標準を提供することになるで
あろうような総不効用にたいする国民所得の比率といったことを論ずると
いうところへまではいってはいないのである、とされるのであった。